

浄

monthly
JÔDO

12

December 2008

法然上人讃仰会



みな人の、おのれとおのが智慧に迷いて、
近き極楽を遠くし、
かほどやさき世間を、
苦しみとなすことは浅ましきことなり。

(佐々貴四郎高綱に示す御詞)

鬼海弘雄『浄土』2008年年間表紙写真の人

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工員、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

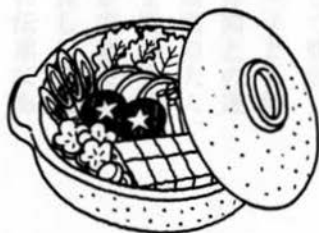
写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年、『India』みすず書房1992年、『や・ち
また：王たちの回廊』みすず書房1996年、『東京迷路』小学館1999年、『印度や月山』
白水社1999年、『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年、『Persona』草
思社2003年、『べるそな』草思社2005年、『In-between8 鬼海弘雄 ポルトガル、マル
タ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年、『東京夢譚』草思社2007年、『集合住
宅物語』みすず書房2004年(撮影・鬼海弘雄 文：植田実)、『メッセージ』樹立社
2006年(撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ)

浄土

2008/12月号 目次

なぜわが子が母に手をかけるのか	花崎みさを	2
講演概録 現代の信仰のかたち③	梶村 昇	8
会いたい人 妹尾河童さん①	関 容子	14
江戸を歩く 第二十二回	森 清鑑	22
響流十方	袖山榮輝	28
連載小説 法然上人とその時代	石丸晶子	32
仏教コラム		42
Jフォーラム		43
浄土誌上旬会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	47
編集後記		48
連載 教えと法話	生野善應	



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

なみざ
わが子わが母を

手に

かけるのか

花崎みさを



○「居場所のない子どもたち」の増加

親からの虐待（身体に傷を負わされる、心をメチャメチャに傷つけられる、面倒を見てもらえない、性的関係を強いられる）や、親の病氣（精神科疾患が多い）、離婚、再婚による新しい家族関係の不調、親の拘禁、そして養育拒否、養育不能などの理由によって、家庭に居られない子どもたちが、近年増加の一途を辿っている。

全国に五六〇カ所ある児童養護施設（そんな子どもたちの家と保護者の代わりをする所）には、現在約三万七千人の子どもたちがそこを二番目の家として暮らしている。彼らとの係わりを通して見えてくる、子どもに係わる社会のあり様と家族の様子について考えてみたい。

まず今の子どもたちは、「子ども時代」を「子どもらしく」生きていまいと言われる。大人も又大人としての自覚に欠け、いつまでも子どもの延長のような、大人として機能していない大人が多いと言われる。それでは今の子どもたちを育てている親は、「子ども時代」を「子どもらしく」生きてきただろうか。子どもとしてのありのままを、仲間との遊びや、学校や地域社会の人々との交わりの中で修得する学びや、情動のままを周囲の大人たちにつけることで、心豊かに育ってきただろうか。そして更に、家族との交流の中で自然に身につける「家庭の文化」や「子育ての文化やスキル」を身につけることができてきただろうか。この辺にこの問題の鍵がありそうに思う。私たちが大人として成長し、家庭を持って子育てをすることの基本は、脈々と受け継がれてきたこのような文化の伝承にあると思うからである。

戦後はすでに六十余年。戦後の復興のために工業化が急激に進み、多くの若者が工場のある街に集中し、核家族化、過疎化、地域社会の崩壊が短期間のうちに社会に定着してしまった。アメリカ文化や民主主義という概念の取り違いも重なって、これらの現象はおかしな形で定着してしまったように思う。その結果、急激な文化や社会現象の変化に戸惑い自信を失った当時の子育て中の世代の方々が、自分たちの受け継いできた家庭や子育ての文化を、子どもたちに伝えられずに年月を重ねてしまった。その連鎖が、今の現象を作った要因の一つではないかと思う。

○親も又「愛されたい」と思っている

施設や里親の元で暮す、種々な理由で親と暮らせない子どもたちは、誰か一人でもいいから、自分のことを本気で愛して欲しいと思っている。しかし親と一緒に暮らしている子どもたちでも、同じ思いを持っている子どもが多くいることに注目したい。立派な門構えの家があり、両親揃っていて、周囲から見ると平穏で幸せそうに見える家庭であっても、子どもにとってはそこは常に緊張していて、良い子を演じていなければならない場所であったり、自分の親が一番大事なものは「世間体」であり自分の欲求の充足であって私ではない、本当は私は母に愛されていないんだと思いながらそこで暮らすしかない子どもがいたり、父の再婚で新しい母になじめず悶々として、ゲームセンター通いや仲間と連なって非行に走りかけてみたり反抗的な態度に出たりと、愛して欲しいサインを送り続けている子どもがたくさんいる。そんな中から、虐待に発展したり、非行であげられたりして児童相談所にかかった子どもが、児童養護施設や里親の元で暮らすことになるのである。

そして「子ども時代」を「子どもらしく」生きられないまま大人になってしまった人たちは、子どもの心を理解することも、本気で子どもと対峙することも、子どもを抱きしめる（愛する思いを伝える）ことも、できないのかも知れない。人との交わりが少なく、わがままに育ってしまうと、親自身が自分の思う通りの子どもでないとその子どもを愛することができない。そこで本気で子どもに拒否反応を示してしまったりする。「自分も心から親に愛されていると思いたかった」「自分も友だちと思いつき駆けまわって遊びたかった」と秘かに自分の子ども時代を悔やみ、「私も本気で愛されたい」と思っている親も多いのである。「子どもより先に、まず誰か私を愛してよ」と。

○なぜわが子を手にかける？

だいぶ前のことだが、十七歳の子どもたちが起こした凄惨な「コンクリート詰殺人事件」という事件があった。その後十四歳の中学生が子どもを殺し、首を中学校の門に掛けてあったという事件があり、又十二歳の中学生が駐車場の屋上から小さな子どもを突き落として殺した事件があり、もう最近では大げさに言えば枚挙にいとまがない程。青少年の犯罪が起こる毎に、私はこの子たちの成育の状況が気になり、その点に注目して報道に接している。その結果は例外なく、その子どもたちが「自分は親に愛されていると思っていなかった」と語る言葉を確認する。そして親は、自分は子どもにいろいろなことをしてあげていた。そんなはずはないと語る。十七歳の青年の一人は、自分は父親からいつも殴られていたと語ったが、親はそんなにいつでもなかったと語っていた。親の思いとのこのずれが問題である。親の思いは、しっかりと子に伝わってはじめて親子の絆は結ばれるもので

あるから。

先年母親が自分の子どもを川に投げて殺し、近隣の子どもまで殺してしまった事件があった。その際の彼女の成育の状況にも注目した訳だが、やはり幸せな幼少時期を過ごしていなかった。しっかり親に愛されてきたという実感もなく、周囲からの嘲笑といじめの中で、自己否定と幸せに生きたいという本能の葛藤の中で成長していた。他の事件も皆、暮らし向きの良し悪しにかかわりなく、満たされた幸福感あふれる成育歴を持っていない。

なぜわが子を手にかけるかという問のもう一つの側面として、次のようなことがあげられると思う。母親にとっては、子どもは自分だけを頼りに生きる存在であり、その認識は持っているが、その故に、母である自分のことを誰よりも理解し味方でいてくれると思ひこんでいる所がある。しかしある時その子どもが、母の存在を否定するような言動をした時などに、殺意を抱いてしまうことがある。

又子どもは独立した一人の人間であるという認識を持つことができず、自分の所有物であるとの観点から判断して、自分が死にたい時はこの子も、と同一視して殺すこともある。過去に親から虐待を受けた経験を持っていたり、地域社会とのつながりが希薄で、家族や親子の確執を打ちあけたり示唆をされたりするチャンスを持ってない時、子どもに刃が向いてしまうということもある。

○「大地のような母」を育む

「子ども時代」を「子どもらしく」生きられない社会現象が続く限り、「居場所のない子どもたち」は増え、子ども虐待はまだまだ続き、親殺し子殺し夫や妻殺しなどの事件は後

を絶たないかもしれない。しかしこの連鎖はどこかで断たなければならない。「自分は親からさえ愛されていなかった」という思いを持ったまま、この子が親になって子育てをすることを思うと、どの時点からでも遅くないので、その子が「本当にこの人に愛されて幸せ」と思える人との出会いを持てるよう、祈らずにはいられない。その事が一連の事件の源であると思うからである。

ではどうすれば良いのか。もはや一人の努力、一家族の頑張りではその仕様が無いであろう。やはり地域の力を活用して、種々な取り組みを実行することが最良の方法であると思う。

「大地のような母」を育てて行くために、地域の親同志（祖父母も含めて）が胸襟を開いて手をつなぐ。これには音頭取りの役目が必要だが、それは役所や宗教団体やNPO法人や地域にある福祉施設や保健センターなどがその任を負い、企画や場づくりをもっと積極的に打ち出すことが必要である。そして何より大切なことは、子どもはその家族の子どもであると共に「社会の子」であるという認識の元で、声をかけ合い（挨拶の言葉だけでも有効）思いをかけ合って、皆で子育てする地域社会を構築する努力をすることだと思ふ。子育て文化の伝承も、一家族単位でなく地域単位で行うことで、昔の人々から伝えられた地域社会の文化までもが復活継承され、やがて時を経て、大地のような大らかであたたかい母がたくさん育って行くことであろうと思ふ。

プロフィール 花崎 みさを

千葉県に生まれる。駒沢大学文学部英米文学科卒業。東京教育
大学教育学部特殊教育学科聴講（2年）

1967年（財）富士福祉事業団に勤務、月刊「ボランティア」の
編集、「ボランティアスクール」の開催にたずさわる。1969年
スイスの国際児童養護施設「ベスタロッツ」に勤務。
（社）日本精神病院協会でOTA通信教育を担当し、1981
年退職しインドシナ難民児童の里親活動をはじめ。

1984年東京福祉商経専門学校講師

1985年社会福祉法人一粒会児童養護施設「野の花の家」を
開設、1991年「フレンドシップアジアハウス」を開設、両施設長

著書「ねえ、おかあさんがして——すてきな「野の花の家」
の子どもたち」(草の根出版会)

法然上人鑽仰会

公開講演会

その三

現代の信仰のかたち

法然上人の

視線
でみる

今

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

2. 山の越え方

どうやったら山を越えられるか。

(臨濟宗、曹洞宗の話しは省略)

法然上人は「南無阿弥陀仏と称えよ」と言う。すると阿弥陀さまが私たちを救ってくださるということです。法然上人の教えはそれだけです。

しかし、私たちはそれが信じられないものだから、ああだこうだと言って理屈をつけるんです。世俗の山のこちら側の知恵です。しかし、それで納得できるようなものではありません。ですから法然上人は「これ本願の不思議なり」と述べております。世俗の知恵で思議することはできないということです。できないと言われておりますのに、それでも何とか理屈をつけようといえます。

臆面もなく私のことを申し上げますと、アメリカから帰ってきた年、昭和三十二年に行って三十五年に帰ってきたんですが、三十六、七ごろ、長野に鉢伏山という山がありまして、その念仏の会に、友達に誘われて行っただけです。そして、田中木叉先生という立派な方が導師で、十日間でしたか朝起きてから夜寝るまで南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称えるのです。

そのときのエピソードですが、私の隣にいらっしゃった方が、数学の天才、岡潔ご夫妻。あの方は念仏の名人ですから、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称えますと、スーッとその世界に入ってしまう。ところが、私は世俗の知恵でこり固まっているものですから、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と言いながら反発ばかりしている。

岡先生とは、それ以来、親しくさせていただきましたが、岡先生は歩きながら南無阿弥

陀仏、南無阿弥陀仏と称えると、バツと数学がひらめく。そうすると、アスファルトの上にしゃがんで数式を書くんだそうです。そのぐらいすばらしい念仏一筋になった方でした。十日間念仏の会をやった。私も何とかして南無阿弥陀仏を心から申せるようにと思って、いろいろ理屈をつけたりしたのですが、上野に帰ってきたとき、「これは精神的暴力だ。南無阿弥陀仏と言って、自分を押し伏せようとしているんだ。」と思ったりいたしました。ともかく我が強いものですから、なかなか「南無阿弥陀仏」と言えないんです。

でも、何とか称えようと思って、理屈をつけるんですが、理屈は理屈ですね。幾らやっても駄目でした。あるとき、ふとこんなことを思ったのです。

南無というのはnamasu、帰依ということです。これは問題ない。

その次の阿弥陀というのが問題なのです。これはAmitayus・Amitabhaを縮めて言っているのです。

阿弥陀の「阿」というのは、英語で言うNot、否定です。だから、日本語では「無」と訳します。

「弥陀」これが問題です。はかるという意味です。だから、日本語で「量」と書きます。「はかる」というのは、いろいろあつて、たとえば机の長さを調べる。それも「はかる」です。あいつは何をしようとしているのかと考える。これも「はかる」です。

Amitayusのyusというのは命、寿です。ですからAmitayusというのははかることのできないほどの命を持ったものという意味です。無量寿です。

Amitabhaのbhaというのは光という意味です。無量光です。だから、阿弥陀仏は限りない光を持った仏という意味です。

その阿弥陀仏に帰依しますというのが南無阿弥陀仏の意味です。サンスクリット語です。そして私は、こう考えました。はかることのできない命というのは、仏さまの命ではなくて、私たち浅はかな人間の命だと思ったのです。私たちの人生は、人間の知恵をもつてして、はかることのできないものです。

その証拠に、皆さま方は子供のときから、今のような自分になろうと思っておりませんか。そうじゃないでしょう。全然思いもかけない人生を歩んでいらっしやるんじゃないですか。私も全く思いもかけない人生でした。

私は大正十四年生まれですから、今、八十三歳ですが、教師だったおやじの薄給の姿を見て、私は実業家になろうと思ったのです。ところが、それから戦争があった。戦争に行けば、ほとんど戦死することは間違いないから、戦死するなら少しでも仏教書でも読んでおこうと思って、それで私は戦地に行く前から仏教書を読み出したのです。軍隊の背囊の中に「歎異抄」を忍ばせて行ったものです。

復員した。四谷の駅前で焼野原を見て、〈あー〉と嘆息し、どうしようかと思いました。そのとき、僕はお坊さんになろうと思ったんです。お坊さんになったら、すばらしい世界が開けるだろうと思ったんです。

それはともかく、自分の人生を振り返ってみたら、思いもかけない人生でした。とても浅はかな人間の知恵ではかることのない人生でした。それがAmityasusです。

Amityasus bhaというのは「光」ですから、社会と考えましょう。はかることのできないこの世の中です。自分の一生も、自分の住んだこの世界も、人間の知恵をもってはかることのできないものです。

そして、阿弥陀仏の仏はButta、覚者、目覚めた者ということです。

だから、阿弥陀仏は、人間があさはかな知恵で、ああでもない、こうでもないと考ええる人生、あるいはこの世の中、そういうものを全部みそなわしておられる仏ということです。南無阿弥陀仏とは、そういう仏に帰依することだと私は理解したのです。

そうすると、南無阿弥陀仏が称えられたのです。

もう少し砕いて言うと、世の中、これから先どうなるだろうかわかりません。叱られるかもしれませんが、テレビである女の人が、この世の中どうだこうだ言うのは全部嘘です。そんなもの当たりつこないんです。絶対に当たらない。確言します。ただ一つ当たることがあります。それは、なるようになるということです。(笑)これだけは本当でしょう。必ずなるようになります。

「なるようになる」ことが絶対なら、そのことに身を任す以外にないじゃないですか。僕は、南無阿弥陀仏というのは、なるようになるという言葉だと思います。ケ・セラ・セラ。(笑)

ちようど私がアメリカへ行っているとき、ドリス・デイという女優さんがいて、ケ・セラ・セラの歌を歌うんですよ。妙に覚えているんですが、ケ・セラ・セラ、なるようになる。あすのことなどわからない、なるようになる。

そのとおりです。これは絶対ですよ。そのことを全部みそなわしておられる、わかっておられるのが阿弥陀仏です。だから、阿弥陀仏に任すんですよ。お任せしますということ。一切任せるといことです。日常生活のつまらんことなどで、とやかく言わないことです。ほおっておけばいいんです。全部ほおっておく。そして、任すのです。

我々はすぐだらん知恵を出す。知恵を出して、知恵で解決できるものは解決なさい。

しかし、どうしても解決できないものがある。それは任すしかない。

ところが、人間というのは弱いものですから、一度信じたら絶対にというわけにいかない。信じて、なるほどなと思うんですが、すぐまた、あさはかな知恵ではかろうとするんです。だから、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏を何回も言うんです。それだけ人間は弱いんです。

それが山の越え方です。山は越えられたとは言いませんよ。言いませんけれども、山の向こうが見えているような気がする。

カール・ブッセの「山のあなた」という詩を上田敏が訳したのがありますね。

山のあなたの空遠く

「幸い」住むと人のいふ

ああ、われ ひとと尋（ト）めゆきて

涙さしぐみ、かへりきぬ

山のあなたのなとお遠く

「幸い」住むとひとのいふ

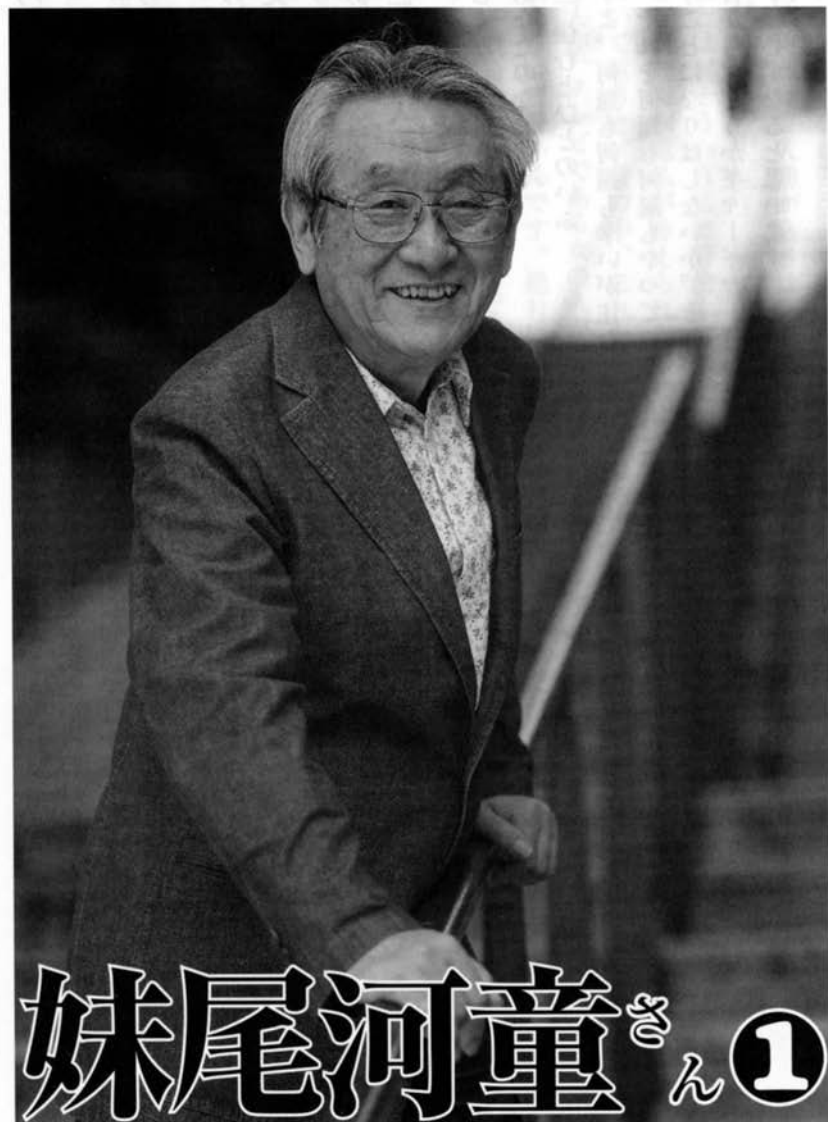
この詩ですよ。何遍も何遍も幸いが住むと思つて行つて、失敗して涙を流して、かえりきぬですよ。それを何遍も何遍もやっているうちに、お任せするしかないんだ。なるようになるということになりはしないか。それが山の一つの越え方じゃないか。

だから今日から、どうかギヤーギヤー言わないで、全部はおつておいたら、きつと何とかなるんです。必ずなると思います。というのが、与えられたテーマに対する私の答えです。

（おわり）

連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

河童さんは舞台美術家であり、エッセイストであり、細密なイラストを描き、小説も書けば、陶芸もやる。『なんでもありの人』である。

たとえば新国立劇場の演劇公演で観た『夜明け前』は、木曾街道の本陣の建物が、鬱蒼と聳える樹々に囲まれて薄暗い光の中に建っていた。藤原歌劇団のオペラ『カヴァレリア・ルステイカーナ』では、幕が開くと、そこは明るいシチリアの村。田舎の教会と広場前の飲み屋が、本物のように現れたので、そのリアルさに圧倒された。

また著書では、一連の『河童が覗いた』シリーズの一つ『インド』篇でも、細密なイラストから本文の文字に至るまで、全て河童さん自身の手描きである。この人の頭の中の仕組みはいつたいていどうなっているのだろう？と驚嘆させられる。河童さんが初めて書いた小説『少年H』を読んだときも、ほとんど衝撃に近い強い感銘を受け、これは間違いなく後

世に残る本だろうと思った。

『少年H』は『太平洋戦争』をはさんだ昭和初期の神戸の一家庭とその周辺が、少年の澄んだ眼を通してまさに細密画のように克明に描き出されている。主人公の『H』と呼ばれていた少年は、普通の子供と同じように、いたずらに明け暮れ、そこら中を夢中で遊び回っていた。その頃、かすかに小石がパラパラと落ちてくる程度の音が聞こえてくる。それが、アメリカ、イギリスを相手にした戦争が始まる前兆だったのだ。中学に進学すると、軍事教練に明け暮れし、やがて学校の講堂に機械が設置され工場化され、授業と工場の作業が半々になっていく。その頃からアメリカ空軍の爆撃が激しくなり、Hの家も焼け落ちてしまう。食糧も乏しく、みんな空腹に耐えていた。一九四五年の八月、戦争が終わったが、あの『愚かしい戦争』はなんだったのか？と虚しい思いに苛まれた。

『少年H』の物語を小学校三年の頃から書



1939年(昭和14年)秋、小学校3年生。セーターの胸に、H・SENOと書かれているのを嫌がり、「Hの一文字だけにしたい」と、母親に頼みこんで編み直してもらったセーター。しかし、あまりにもHという文字が大きかったためよく目立ったので、たちまち「エッチ」という渾名をつけられてしまった。

き始めた理由は、Hと同年齢の少年少女にも読んでほしかったからです。戦争って、いきなり爆弾が落ちてきて始まるのではないことを伝えたかったからです」

河童さんにこの大作を書く気にさせた二人の友人がいた。一人はノンフィクション作家の澤地久枝さん。「彼女が三回目の心臓の手術を受けることが決まった直前に、有楽町の喫茶店で会った。彼女は真剣な顔で「河童さんは十冊も本を出しているのに、まだ戦争のことを書いていないでしょう。貴方が少年時代に体験した『あの戦争』のことを書き残す義務がありますよ。戦後、鉄道自殺を試みて失敗したことも含めて、全部残らずね」と言われた。

もう一人が立花隆さん。「彼はインタビュアーの名手ですから、聞き出すのが上手いんです。ある日、彼の家に遊びに行ったとき、原稿を書き終え、次の原稿に向う間の休憩時間だった。立花さん自ら足で踏んで作ったうど

んを食べさせてもらっているとき、『河童さんちのご両親はクリスチャンだったんだって？僕のお袋もクリスチャンだった。戦争中は弾圧を受けて大変だったでしょう』と、聞き出すので『父親が洋服屋だったから戦前のお客にアメリカ人やイギリス人が多かったのと、クリスチャンだったので、スパイ一家と呼ばれた。親父は特高警察の取り調べを受けたりしましたね』そんな話をしている途中で、立花さんが、『その先の話は小説で読ませてもらいたいなあ。エッセイだとディテールが書けないから、小説がいい。本人が主人公で登場するのが照れくさいなら、これは小説だ』と云いながら、本当のことを書けばいいんだよ』と云った。それを聞いて気が楽になった。二人に背中を押されて、書く決心をしました。

書き始める前に、親しくしていた三人のベテラン編集者に、意見を聞いてみた。すると、三人とも同じようなことを云った『戦争時代

を書いた本は売れない。子供は本を読まない。という二大ジレンマスが出版界にあるんです。だから、今までの河童さんの本が売れているからと言って、今度の本は売れませぬね』と云いました。僕は『無理かね？』と聞き返すと、『絶対に無理です』と断言した。ヘソ曲がりな僕は『絶対無理』と言われたので、『じゃ、やる』と書き始めました

「赤盤の兄ちゃん」「タンバリン」「オトコ姉ちゃん」と、三つの章を書き終ったとき、尾道の友人から電話がかかってきた。

「啓文社という大きな書店をやっている手塚弘三さんと広島県の各地に二十数店舗を持っている人で、出版の目利きとしても知られた人なんです。彼が、河童さん今なにを書いておられるのかなあ？読みたいからFAXで送ってもらえんかのう。」と言われたので送りました。ところがリアクションがなかった。面白くなかったのかなあ？と心配していると、三日後に講談社から電話がかかってきて、

鉄道自殺を試みた中学四年生、十六歳の時の河童さん



河童さん八歳の時の家族写真、父・盛夫、母・敬子、妹・好子、奥の横にはクリスチャンだった母の好きな言葉「愛」の字が……



『あの小説を是非うちの社から出させてください。明日の午後お伺いしたいのですが…』には驚きました。翌日我が家に来た三人は、出版局の天野敬子局長、林部長、市田編集担当の面々でした。なぜ講談社に、書き始めたばかりの原稿が渡ったのか不思議に思ったら、天野さんは尾道の出身で、子供の頃から啓文社で本を買って大きくなったと聞いて、謎がとけました。

それにしても、まだ三章しか書いていないし、この後どうなるか僕にも判らないのにと呟くと、林部長が『これは久々のベストセラ―間違いないの本になります』と握りこぶしでテーブルを叩いた。講談社は『青田買い』をしたのです。

河童さんは、書くとしたからには『出版界二大ジンクス』とやらを、破れないかと考えたそう。そこで五つのことを自らに課したという。

「一つ目は、あの時代に生きた子供が、自分

の目で見たこと、聞いたこと、感じたことを、子供の目の高さで書く。大人の思い出話にはしないこと。二つ目は「あの時代」を伝えること。でも決して、資料を羅列した感じにならないようにする。その方法として、街に住んでいる人の暮らしぶりや、家族の会話、子供たちの遊びや学校での様子などを書けば、自然にあの時代の雰囲気が伝わると思った。

三つ目は、登場人物を実名で書く。実名で書くからには嘘は書けない。そのために登場する友人たちに、原稿をFAXで送って、間違いないか？ 思い出したことがあれば教えてほしいと協力を頼んだ。四つ目は、文芸作品ではないから、できるだけ形容詞を少なくして、読みやすい文章で読者にストレートに伝わるようにすることを留意した。五つ目は、子供にも読んでほしいので、ほとんどの漢字にルビをふりました。昔は大人が読む小説や新聞まで総ルビでしたからね。この五つのこととをやってもダメだったら、「絶対に無理」

だと忠告してくれた編集者に、確かに二大ジंकスは存在しました。それを破ろうと思ったのは不遜でした、と謝ろうと思った」

河童さんの緻密な作戦は見事に効を奏し、驚異的なベストセラーになった。読者カードの年齢別集計でも十代から九十代に至る幅広い支持を得たことが、年齢別グラフの台地型でも証明されていた。

『少年H』のHというのは、河童さんの本名肇の頭文字。「河童」は成人してからのニツクネームであるが、Hは小学校四年のとき、藤原義江の美声をレコードで聴き、感動している。まさか十五年後に、藤原さん本人に出会い、上京を勧められ居候をすることになるうとは、思ってもいなかったが……。

『赤盤』というのはラベルの色が赤いレコードのことで、アメリカで吹き込むから普通のレコードよりもうんと値が高いんだよ。日本人で赤盤の歌手は藤原義江だけだ』と、うどん屋の出前の兄ちゃんが得意気に教えてくれ

た。東京から来たというインテリの兄ちゃんの部屋は店の二階の三畳間だったが、本やレコードが沢山あった。Hが好きだった『女心の歌』がオペラの Ariaだと教えてくれたのも兄ちゃんだった。それでHは敬意を込めて『赤盤の兄ちゃん』と呼んだら、よせ！と血相を変えて怒鳴られた。後で知ったのだが、ア力とは共産党員のことだった。数日後、特高警察に逮捕されて、二度と帰れないような戦地に送られてしまった。これが戦争の恐ろしさを身近に感じた最初だったね」

そして切ない話は『オトコ姉ちゃん』。旅役者の女形だった優しい青年が、病身の老母の面倒をみるためにHの町に住むようになる。彼にも召集令状が来たが入隊せずに行方をくらますが、ある日廃屋になっていたガソリンスタンドの汚い便所の中で首を吊って自殺する。それをたまたまお腹が痛くなつて、便所に駆け込んだ少年Hが発見する。

「彼は自分が軍隊に入ったらどんな目に遭う

か判っていたから、脱走したんでしょね。病気の母親のことも心配だっただろうし……。読者カードの中でも、一番多かったのが『オトコ姉ちゃん』の章でした。小学四年生の女の子も『オトコ姉ちゃん』の話が大好き。と書いていましたね」

少年Hのお寝しよがなかなかやまなかった原因は「タンバリン」の章に発していると思われる。

「そうかもしれませんね。母は熱心なクリスチャンで、やがて父親も洗礼を受けたけど、僕と妹も献児式とかで、神に捧げられた。育て方も厳しかったですね。聖書と教科書以外の本を読むことを禁止され、嘘を絶対についてはダメ。彼女は僕を『汚れなき天使』のように育てたかったんだろうけど、それは無理というもんです。母親に口答えすると十倍もの言葉が返ってくるから、僕は十五歳の元服まではお母ちゃんに逆らわないことにしよう」と固く決心した。でも本当の僕は思い通りに

はならんよ。」と思つていたんです」

Hが旧制中学の四年生になったとき、ついに爆発する。それが自殺未遂事件。ある日の夕方、一家で卓袱台を囲み、母親がご飯を茶碗によそつていたら、復員兵のような痩せた男が戸口に倒れこんだ。すると母親はみんなの茶碗から少しずつご飯を削り取り始めたという。

「またそんなことをする！ キリがないやろう！　」と言つて茶碗を奪い返して、父親の顔を見た。僕は、父親らしい言葉を発してほしかったが黙っていた。カッとなった僕は釜の蓋をつかんで父親めがけて投げた。避けてくれると思つたが、父親は動かずに飛んでくる蓋を顔で受け止めた。額から血が流れた。お袋はオロオロし、妹は『お兄ちゃんなんか死んでしまえ』と泣き叫んだ。僕もこのまま生きていると何をしでかすか判らないから、死んだほうがいいかなあ、と思つた。死ぬならあそこだと須磨駅の西のガードへ行つた。枕

木の間に体をぶら下げて、列車が近づいたら身を乗り出そうと思つた。やがて列車が来るのが枕木に伝わつてきたが、その揺れは次第に激しさを増し、枕木にしがみついているのがやつとだった。頭上を列車が轟音を立てて通つて行つた。僕は予想もしていなかったショックを受けた。我に返つた僕は、精神病の治療に昔は電気ショック療法があつたことを思い出した。それは頭に電流を流してショックを与えるものだった。その瞬間は身体の細胞は、生命を守る、という方向に直列し、ヤワな思考回路など吹っ飛んでしまふ。あのレールの物凄い振動が同じ役割りをして僕を救つてくれたんだろうと思う」

(つづく)

第二十二回

江戸を歩く

運河の町



森 清鑑

大江戸ウォーカー

日本橋界限

長さ二十七間（敷き板の上三十七間）の日本橋は、正に江戸を代表する橋である。婉曲のラインが美しい。橋の上からは富士山が間近に迫り、朝日、夕日に見応えがある。見下ろせば日本橋川を無数の船が行き交っている。この光景は北斎や広重の筆欲をそそらずにはおかなかった。日本橋の名の起源は諸説ある。お日様を拝める処、江戸五街道の起点、富士と家康の駿河を眺望できる橋、などなど。誰云うと無く、人々は日本橋と呼ぶようになった。最初の橋の創設は慶長八年（一六〇三）。これは家康の埋め立て、整地、運河の掘削大工事と呼応している。そしてこの橋は創設の翌年、諸国への道程の起点となった。江戸っ子は日本の中心というイメージを持ったに違いない。それにたがわぬ橋の工事が連綿と行われている。開設以来、明治六年まで、橋の架け替えが為されること十九回。

平均十六年に一度、架け替え工事が為されたことになる。長谷川雪旦は、北の魚河岸から南の通一丁目に向けてこの日本橋の模様をリアルに描いている。これほど多くの人々が行き交っている橋も全国にないであろう。せわしく歩く者、立ち止まって周囲の景色を眺める者、大八車で荷を運ぶ者、実に様々な人々がいいつも大勢歩いている。広重の有名な「お江戸日本橋七つ立ち（午前四時）」大名行列の出立場でもある。東海道に向けて橋を渡ると通一丁目の広小路。右手に高札場がある。幕府のおふれを告知するにはもってこいの場所だ。その向かいには晒し場がある。これは罪人の見せしめのためにある。船は荷を運び、多くは一石橋に向かっていく。数人の漕ぎ手がいる快速船、屋形船もある。

一石橋

日本橋川がお堀に注ぐ処に一石橋がある。この橋の上に立って後ろを振り向けば優美な



◆江戸名所図会 日本橋風景 下、魚河岸、橋を渡った右に高札場 日本橋川右に行く一石橋。

日本橋とその後方に江戸橋が見える。今度は、江戸城を見据えると、正面、堀の向こうに道三堀。家康が江戸城建築の際に建材を運ぶために掘削した堀である。掘った土は埋め立てに使われた。銭瓶橋、その先に道三橋が架かっている。すぐ左に、御堀に架かる呉服橋、ずっと先に鍛冶橋が霞んで見える。眼下の石垣から先の連なる屋根は北町奉行所だ。呉服橋が奉行所に入る唯一のルート。右を見ると常盤橋。その東側に金座がある。前方、広大な江戸城が霞んで広がっている。一石橋は、庶民が江戸城を間近に鳥瞰できる唯一の橋であった。その景色は、雄大そのものである。そこで人々はこの橋のことを八見橋と呼んで見とれた。

魚河岸

日本橋から江戸橋までの北側に魚河岸がある。摂津から家康に呼ばれた、佃島の白魚漁師、森孫右衛門とその息子がここに出店を開

き、献上品以外の肴を扱ったことが河岸の始まり。江戸が進むに連れて、全国から集まってきた漁民が次々と魚店を開く。こうして日本橋魚河岸は、江戸になくてはならぬ市場として拡大を続け、天下の台所となった。魚は、江戸湾を初め、房総、相模湾から夜を徹して運び込まれる。早朝早くから市が開かれ、売人、買人など魚商人でごった返す。正に一心太助の「どいた、どいた」の世界である。長谷川雪旦はこの様子を詳細に描いている。初鰯の季節ともなると、特に相模湾で獲れた鰯は上物とされ、江戸っ子はこの高価な値の魚を、銭をはたいて買い求めた。魚河岸ができて百年も経つと、大和の国出身の助五郎は、鯛の生け簀を常備したという。

駿河町

日本橋を渡り北に降りると、室町1丁目の広小路。右が魚河岸、左が品川町河岸である。室町通の次の角、西側が品川町の家並み。そ



◆江戸名所図会 八見橋
左一石橋を潜り左に行く
と呉服橋、鍛冶橋。中央
お堀。正面、道三堀。銭
瓶橋。道三橋。右 常盤
橋。左中央、呉服橋を渡
ると北町奉行所。中央上、
大名屋敷と御城。

の次の角を左に曲がると道の左右が駿河町である。この町造りは江戸の都市設計の秀逸さを良く顕している。すなわち、駿河町通の真正面に江戸城と雄大な富士の景色が展開する。駿河町は、当初から、江戸っ子にこの風景を見せるために造られた町という。そこで多くの絵師がこの光景を描いた。広重の駿河町絵は今日多くの人にとってお馴染みの場面である。道の左右に江戸を代表する呉服店「越後屋」を初めとする大店が続く。真っ直ぐ伸びた道の果てに見えるのは御堀の石垣。これは長谷川雪旦の絵だとよく分かる。そこに出れば、右に常盤橋、左に呉服橋が見える。御堀の先は大名屋敷に続いて、広大な江戸城。そして中央高くに富士山がでんと聳えている。富士を正面に望む方向。そこで江戸の人々は駿河町と名付けた。

越後屋、すなわち三井呉服店（三越）は、一六八〇年代に三井高利が開いた店。彼は新商法を次々と打ち出す。「正札付き、現金掛

け値なし」は見事な戦略である。当時の呉服商いは皆掛け売りで商品を渡した後、年の瀬などに代金を回収するシステム。このため、売る方も買う方も不安定要素があった（価格設定などでも）。それをその場で正札により現金取引を行う。今日では当たり前の方法だが、これを最初に行ったのが越後屋である。価格は、金利分、値を安くして売った。客の側もその場で決済が済み、安心。大好評。この商法を他の呉服商も後に次々と見習うことになる。改革は続く。三井は初めて商品毎に専門の販売員を置き、顧客の便宜を図る。急ぎの注文には客を待たせておいて仕上げ、用立てる。反物の切り売りをする。それまで庶民は手ぬぐい一本買うにも切り売りがなくて、近所の皆で布地一反を買い、分配するしかなかったという。さらに俄雨でも降れば、貸し傘を用意し、誰にでも貸し出した。この越後屋のユニークなデザインの傘は、ステータス・シンボルとして当時の江戸っ子の自慢



◆江戸名所図会 日本橋魚市

になったという。越後屋は全国的に有名になった。その後、三井高利は呉服店に隣接して両替店も開く。三井財閥形成の端緒である。

それからあらぬか、駿河町を過ぎて御堀に向かうと、本両替町と名を変える。隣接する右手は金座である（日本銀行）。ちょうど掘りに架かる常盤橋の東一帯の敷地。家康が関ヶ原の合戦の翌年に設置した金貨の鑄造所である。敷地面積約三千三百坪。管理役人は代々、後藤家が司る。

金座を右に見てお堀に沿って北に歩くと、竜閑橋。東の浜町堀が「逆くの字」に西に折れ曲がって流れる竜閑川がお堀に注ぐ処。この橋を渡ると、左に堀沿いの鎌倉河岸が展開する。天正十八年（一五九〇）、家康は秀吉の命を受けて、太田道灌が築いた江戸城に入城する。直ちにすさんだ城の改築に乗り出す。相模の国から材木石材（石垣用）がここに運び込まれ、鎌倉から来た材木商が築城に伴う部材を取り仕切る。ためにその荷揚場は鎌倉

河岸と呼ばれるようになった。この時、家康が近江から連れてきた、甲良家は大棟梁として築城を仕切る。彼は、この地に住み、江戸城を初め、増上寺、日光東照宮の建設にも力を尽くす。竜閑橋から広い鎌倉河岸の東端をなめて歩くと、左に河岸に接して鎌倉町。ここに白酒で有名な豊島屋があった。長谷川雪旦が描く豊島屋酒店の図は、賑わい極まれている感がある。お城普請で集まった武士、職人、商人を相手に始めた、酒屋、飲み屋の大繁盛。白酒は蒸したもち米にみりん、または米麴と焼酎などを混ぜて仕込み、熟成されたもの。アルコール度十％、甘いが効くりキュールで甘酒とは違う。雛祭りの祝酒で、初春2月の売り出し日には、なんと千四百樽という膨大な量売り上げたという。その売り出し日の賑わいを描いたのが雪旦の絵である。この店は、数々の川柳を生み出している。「山なれば富士、白酒なれば豊島屋」（豊島屋の歴史より）。

◆「広重」する賀てふの図



◆江戸名所図会 鎌倉町、豊島屋酒店白酒を商う図
…雛祭り、市をなして賑へり。



左に鎌倉町の家並みを見つつ北にちよつと行くと、割合大きな道に出る。その角を右に曲がり、竜閑川の北側を東に歩くと、紺屋町一丁目から三丁目へと染物職人の町並が続く。そしてそのまま北に流れる神田川までの一帯が職人の町である。塗師町（漆塗職人）、元乗物町（駕籠職人）、紺屋町（染物職人）。その北側に鍛冶町、白壁町（左官職人）。さらに蠟燭町（ろうそく職人）、大工町、鍋町（鋳物職人）、銀町（銀細工職人）、佐柄木町（幕府研師）、連雀町（背負子職人）。神田川まで連綿と職人町が続く。これら神田職人町の大きな特色は、幕府が特定の職人に土地を与えて発展してきたことだ。例えば、鍋町は御用鋳物師、椎名伊与の、佐柄木町は御用研師、佐柄木弥太郎の、紺屋町は紺屋頭の土屋五郎右衛門の拝領地として出発した。このことは幕府が有力な御用職人に土地を与え、いわば江戸に工業団地を造ったということ、江戸都市計画造りの一端を思わせる。

紺屋町を歩くと、細い川が張り巡らされている。神田川から引かれた、藍染川である。この川は、藍染職人の家を囲むように流れている。この川で彼らは染物の生地を洗い、屋根に設えた槽に干す。幾条もの浴衣地が風にそよぐ様は、江戸の風物詩であった。広重はお城に向けての、この光景を描いている。

紺屋町一丁目の北側に白壁町がある。ここに特異な才能の人、平賀源内や絵師鈴木春信が住んでいた。また、紺屋町三丁目の東角を北に曲がると、藍染橋。渡ってさらに行くと、お玉が池跡。左に曲がると右手に市橋下総守の上屋敷。この屋敷の西側に隣接して、江戸末期三大道場のひとつ、剣豪千葉周作の玄武館があった。神田はこうのように技術を持った武士と町民が息づく町であった。江戸っ子は、「芝で生まれて神田で育つ」である。

◆広重 神田紺屋町の図



【参考文献】

江戸史跡事典 上巻 新人物往來社
 広重の大江戸名所百景散歩 人文社
 江戸名所図会 上巻 角川書店

はじめにはわが身の程を信じ、のちには仏の願を信ずるなり。た
だしのちの信を決定せんがために、はじめの信心をばあぐるなり。

法然上人【御消息】

はじめに我が身のほどを省みて、そのうえで阿弥陀さまの本願を信じるのです。
つまり、本願のお力が信じられるようになるために、我が身のほどを省みるべき
ことを先にあげているのです。

まだまだ序の口

高校三年の時の授業中、黒板の字が何か変だと思ったことがあった。

「は」であるべきはずの字が「ほ」に見えたり、「け」であるはずが「は」に見えたり。あるいは学校の帰り道、三日月のとんがりがり三つに重なって見えたり、しかも輪郭がぼやけている。調べたら、近眼と乱視だった。以来、眼鏡のお世話になっている。もちろん、何度か作り代えているが、以前、眼鏡を踏みつぶしてしまったことなどもあり、今は、ほとんど同じデザインの眼鏡を二つ持っている。

さて、この二つの眼鏡。理屈は忘れてしまったが、新しい方のレンズの度を少々軽めに設定してある。ときおり眼鏡をかけかえると、目が慣れるまで少々時間がかかる。微妙な違和感が残るのだ。

じつはこの夏、少々暗がりの中で小さい字を読もうとした時、眼鏡を代えたわけでもないのに微妙な違和感があった。映像として文字は見えるのだけれども、文章を目で追ってみようとするとき「あれっ、うーん。ちょっとタイム」という感じになった。目で追う前に目がくたびれてしまうというか、どこに焦点を合わせればいいか分からないといった感じである。思わず、顔を近付てみた。遠くに離してみたりしているのである。

この話を眼鏡をかけている六歳年上の先輩に話してみた。すると、その先輩、カバンからもう一つの眼鏡を取り出した。「もう、こっちがないと新聞読めないんだ」そうだ。もちろん、それは老眼鏡。二つ年上の先輩にも聞いてみた。「最近、眼鏡代えただけど気が付かない？ ほら、これ遠近両用」

頭髪の短い私も、この一、二年、鏡を見るたび白髪が目立つようになった。朝、鬚を剃るときも、白いものが増えてきた。何かの拍子にお檀家さんから「若いんだから」といわれると、「オレだって、ちゃんちゃんと年取ってるんだよ」と口答える。でも、人生の先輩方には「何、言ってるの。まだまだ若いよ」と言い返される。四捨五入すればもうじき五十。その返答に少々反発も感じていたが、いざ自分に老眼の兆しが見えてくると、たぶんこれが老いの序の口なんだと思えてきた。この先、自分の体がどう衰えていくのか。その時、自分は何を感じ、何を思うのだろうか。まだまだ序の口。この先がまだある、奥があるのだ。

法然上人は阿弥陀さまのお救いに預かろうというのであれば、まずは自分自身の身の程をよくよく省み、わきまえなさいと仰せになっている。そのうえで、阿弥陀さまのお救いを仰ぐのであると。

なまじ自分のことを過大評価していると、「やっぱり自分の力」自力でさとりを開くのが尊いことなんだ、阿弥陀さまにおすがりしなくても何とかなるんじゃないか」と勘違いして、それが極楽往生を阻む原因になってしまうということなのだろう。

唐の善導大師の仰せでは「私たちは何度も生死を繰り返してきたが、その都度、煩惱を振りほどくことができないまま迷いの世界を経巡り続けてきた至らぬ凡夫である」という。冒頭の法然上人のお言葉もそれに基づいており、善導大師は我が身を煩惱だらけの凡夫と信じ、凡夫をお救い下さり、自ら建立した西方極楽浄土に往生させてよう願って誓われ、そしてそれを今現に実現し続けている阿弥陀さまを信ぜよ、阿弥陀さまの誓いを信じよというのである。

それにしてもだ。老いの序の口を、もう若くない、年だといって勘違いしている私である。他人さまには「自分を省みよ」と説いたところで、「お前が思っているお前の煩惱なんて、まだまだ序の口。我が身の煩惱を見定めよだなんて、まだまだ甘い」と、きつとどこかで笑われていることだろう。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

法然上人
とその
時代

シリーズ第五章

壇ノ浦

最終回

作

石丸晶子

画
アーサ



十三

壇ノ浦の合戦で平家滅亡の知らせは、早馬によつて四日の後には後白河のもとに届いていたが、詳細は不明で朝廷は苛立っていた。義経からの正式な報告が届いたのはそれから数日経った四月三日である。

この日夕刻、源八兵衛広綱なる義経の郎党が、早馬で院御所に報せてきた。

「去んぬる三月二十四日の卯の刻、合戦開始。壇ノ浦、赤間ヶ関、田ノ浦、門司ヶ関にて、平家遂に攻め落とし、内侍所（神鏡）、神璽（曲玉）、都へ帰り入られます。ただ、三種の神器の中、草薙の剣のみは、われら海中を探すこと数十回に及びましたれど、遂に見出せず、まことに申し訳なきことにごさいます。九郎義経、近々内大臣殿以下の生け捕りましただ者ども数十人を引き連れて参り候」
階の下に片手と片膝をつくつと、義経の口上をこう広綱は伝えた。

「先帝はいかがいたされた。ご無事であろうの」

後白河の問いを側近の藤判官信盛が取り次いで広綱に訊ねる。

「まことに恐れ多きことながら、帝は二位殿とともに海中にお沈み遊ばされました。源氏の侍どもが気付き、すぐ海中にもぐり、お引き上げ申そうといたしました。海中、いくらお探しいたしても、御姿を見出すことが出来ませんでした。二位殿のご覚悟深きがゆえであると、九郎判官以下、われら御いたわしさに涙いたしました」

「女院さまも、して建礼門院様も、海中にお沈みなされてか」

「帝の後に続いて海に入られました。われら、御髪を熊手にて絡めとり、海中よりお引き上げ申しました」

「何ということをし」

「御いたわしや」

後白河の傍らに控える殿上人たちは互いに



顔を見合わせ嘆息しあった。

「内大臣は生け捕られたと申したな」

「内大臣殿はご子息清宗殿とともに海に入られました、泳ぎの名手にて、二人して海中を泳いでおられますところを、われらが船に引き上げ、ご無事であります」

「ブッ」一瞬、それまでの緊張した空気が解けて、失笑が起こった。殿上人たちはあるいは互いに顔を見合わせて頷きあい、あるいは顔を左右に振る仕草をして、軽侮の空気が広がっていった。

「他に生け捕られた者たちは誰れ誰れぞ」

「平大納言時忠様はじめ主立つ方々三十八人。

清盛公のご子息知盛殿および御孫、弟君とそのご子息方はみな様、海にお果てなさいました。平家ゆかりのご出家の方々はみな様生け捕られ、ご無事であられます」

「女房がたは如何である」

「北の政所さまはじめ女房がた四十二人、みな生け捕られておられます」

義経に率いられて、その平家の捕虜たちが都へ入ったのは四月二十六日であった。

生け捕り三十八人の人々はみな、囚人の白衣を着せられて、車の前後のすだれを開けた八葉の牛車に乗せられ、大宮通りを北へ進み、さらに六条通りを東へ引き回された。

車が行く沿道は見物客でこった返す有様である。

京中に止まらず、遠国、近国の貴賤男女が、身分の上下を問わず山々寺々から雲集した。彼ら見物客たちは、こった返す群衆に後ろを振り返ることも出来ず、牛車に乗ってきた身分高い者たちさえ、車の向きを変えることができぬ混雑であった。

ここ数年前から治承・養和の飢饉、源平の合戦と打ち続き、人間の多くが滅びた、と言われるほどであったが、ここに集まった大群衆を見ると、生き残った人数はなお多かったと思われた。

「驕る平家は久しからず、因果応報じゃ。そ

れ見たものか」

とあざ笑う者。

「栄枯盛衰は人の世の常と申すが、それにしても何と哀れなことよ」

と無常の世に涙する者。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」

と一心に念仏する者。

さまざまな群衆がどよめいた。

後白河法皇はじめ公卿・殿上人たちは、一同そろって六条東の洞院に車を停め、棧敷を敷いて見物していた。

虜囚の身を恥じ、白い直垂の袖を顔に押し当てて目も上げることができずにいる平家捕虜が多かったが、しかし宗盛だけはさして気落ちした様子もなく、黒山となつて集まった大群衆を落着きなくキョロキョロと見まわしていた。

春の日差しの中、八台、九台、十五台、と捕われびとを乗せた牛車が都大路を通っていた。

平家の人々はそろつて美しく、優雅な人々であつた。それが足かけ三年におよぶ、波間に漂う都落ちの暮らしが襲つたのである。潮風をうけて彼らはすっかり痩せ黒ずみ、とてもその人とは見えない姿を晒していた。

「以前はあの人々に視線を向けられ、ことばの一つもかけて欲しいと思ひもしなかつたが、かかる姿を見ようとは思ひもしなかつた」
「かつては殿上人、藏人たち数十人が、われ先にと平家御車の前驅に立つたものを。今、この御有様になられたとは」或る者は涙し、或る者は興味津津の様子で、棧敷の殿上人たちがささやきあつてゐる。

一方、こうして男たちが京中引き回しの恥辱を受けているさ中、壇ノ浦から生還した女たちは京中引きまわしの恥辱を免除され、それぞれ縁故を頼つて引き取られていった。

この間、都に入つた建礼門院は東山の北限・神楽岡西麓の吉田に身を隠していた。

義経の差配であつた。

十四

捕虜たちが引き回されたその夜、後白河の側近たちは院御所に集まっていた。

亡き安徳幼帝と生還した建礼門院の今後を話し合うためである。

もともと、話し合うといっても、すでに鎌倉の頼朝から、後白河のもとへ生還した平家に対する要請書が届いていた。

「建礼門院がことは即刻出家させ給え。国母とは申せ、勅勘を蒙る平家の女なれば、このこと、よろしく勘案してしかるべし」というのである。

要するに、「早々に出家させ、皇室の女性として扱わず、逆賊平家の女として扱え」という趣旨であった。

「義経から、女院は吉田の坊に入られたという報告を受けた」

集まった殿上人たちを見回すと、後白河はいった。

「中納言法印慶恵ほういんきやうえという奈良法師の僧坊と申しておった」

「平相国のご息女とはいえ、御国母。慶恵きやうえの僧坊とはおいたわしうございます」

側近の泰経はそう言うが続けて、

「あの庵は慶恵のものではありません、何年もこの方、住む者はなく、荒れ放題に荒れた草庵。庭は草深く、軒には蓬が生い茂るにまかせる有様。すだれは落ちて寝所しんじょもあらわに見える坊にございます。あれでは雨風もふせげますまい」

「まことにお痛わしけれど、鎌倉の命を受けた義経がすでに差配したことなれば、致し方ありますまい。今、鎌倉に逆ろうては、われらとてどうなるやも知れませぬ」泰経につづいて信盛がいった。

「お気の毒ではあるが、致し方あるまい。頼朝が寄越した要望書もなかなか強気のもの」の

と後白河は、

「ただ、ご出家の僧坊を慶恵の庵室にすることはできません。寝所も見える破れ草庵でのご出家は、御仏にも失礼であろうぞ」

「いかにも、仰せの通りでございます。してよき僧坊はありましようや」側近中の側近泰経が応えた。

後白河は頷いて、

「八条女院にんぎんがの、東山の法然房に依頼しては、と仰せられておる。法然房は、一の谷で生け捕られた重衡に授戒した僧でもあり、美作みまさかの出であるが、幼い日には父を夜討ちにあつて殺されたそう。して、この法然房なれば平家の悲運をいたわる心も深かろう、と女院は仰せ出されておられる」

「法然房でございますか。無位無官の法然房を戒師にご出家されとなれば、鎌倉は何も言いますまいが」

「無位無官とはいえ、元は叡山で智慧第一の法然房、と称えられた御僧にございます。二十五年の長きに亘って民衆済度の道に苦しん

だ由にございますな」

「十年も前になりますか、念仏による一切衆生救済とやらの阿弥陀の誓いを悟りましたそう。高徳の聖ひでゆきにございます」

「そういえば上西門院様、八条女院はちじょうにんぎん様の法会に、近ごろ法然房は招かれて法話をしたと聞いておりますぞ」

「お、平家一門でも、重盛殿なんぞは何度か招いて法話を法然房に願うたことがありますしたな」

居並んだ殿上人は口々に言葉を交わしあつた。その一つ一つに頷きながら泰経は、

「して、院には法然房に戒師をさせるお心にございますか」

「決めかねておる。平家一門とはいえ、高倉帝の中宮ちゅうぐうで御国母……」

「院、わたくしが考えますに」

と泰経は膝を進めて、

「鎌倉に気兼ねして吉田の御坊などで女院様が出家されとなれば、朝廷の権威が地に落

ちましよう。ご一門とはいえ、女院様は先の帝の中宮にして先帝の御母。法然房はたしかに高德の聖にて帰依する者数多い僧にはございますが、無位無官の民衆済度の聖にございます。また法然房の東山の草庵は狭く、女院様のご落飾される場所にふさわしいとは思われませぬ。今は鎌倉に気を遣いつつも、われら朝廷の權威をも示すことが重要でございます。」

「よう申した、泰経。で、これぞと思う戒師を存じておるか」

「大原の本成房湛敷ほんじょうぼんたんしゅうは如何でありましょうか。湛敷は格式高き叡山の僧なれど、念仏聖で法然房の弟子。もとより親交がございます。して、先ほどから考えておりましたが、ご出家の場所は東山長楽寺が適当かと存じます。長楽寺の別当阿証房印西あしょういんせいはこれも法然房の弟子で念仏聖。阿弥陀仏の一切衆生救済の教えは、どんなにか女院様のお心のお慰めになることかと存じます」

「いかにも、名案である」
後白河は膝を打った。

「戒師は叡山の僧にして念仏聖の本成房湛敷ほんじょうぼんたんしゅう。ご出家の寺は名利長楽寺。ご出家の日は五月一日と泰経が申し寄越しておる。この日、女院には長楽寺でご落飾頂こうぞ」

十五

院御所で、後白河が集まった殿上人たちと話し合っているその夜、法然上人の東山の草庵くわんには平基親へいきちかが訪れていた。庵室の隅、法然上人の後ろには弟子の信空が慎ましく座している。

「建礼門院様は法印慶恵ほういんけいゑの僧坊に入っておりますが」

と基親は法然上人に、

「師僧にもご存知のように、あの僧坊は荒れ放題に荒れ果てた庵。僧坊の周囲は源氏の武者に固く警護されて、都の者たちはお見舞いにも参上できません。やつれ果て、瘡せに瘡

せられたそのお姿を、垣間見た者はあまりの御いたわしさに、顔も上げえず、むせび泣いたと洩れ聞いております」

「そうであろう、そうであろう」低く、つぶやくように法然上人は言った。

「そうであろう」臉を閉じた上人は低く繰り返した。

ここ数年、法然上人が目にし、法然上人が耳にしてきたものは、まさに末法乱世の地獄の世であった。基親のことばを聞きつつ、法然上人の心には、あらためて、過去現在におよぶ末法乱世の姿の一つ一つがよみがえっていた。

この法然上人のもとに西海に落ちた平家の情報、大まかなものではあれ、入ってくるのは速かった。都と西海を行き来する商人や漁民たち、そして農民。

行き来する者の中には僧侶もおれば廻国の聖たち、さらには遊女もいた。彼らによって、早々に、法然上人も都の庶民たちも、おのずと

平家の情報入手することになるのであった。

この人々によって、すでに何日も前に、法然上人の許には安徳天皇がどうやら入水されたらしいこと、壇ノ浦に沈まなかった総大将の宗盛父子や、建礼門院はじめ女性たちが生け捕られ、近日中に都に護送されること、などがもたらされていた。

新たに滲みでる涙を懷紙で拭いながら基親はつづけて、

「師僧におかれましては、すでにお聞き及びのことと存じますが、今日は生け捕られました内大臣父子はじめ平家の武者たちの洛中引き廻しもございました」

「……」

「やがて鎌倉に送られましょう」

夜風に燭台の灯がまたいた。

「わたくしも平家の方々が引き回されるのを見ておりましたが」

基親は言った。

「その哀れさは心に沁み通り、生死無残の人

の世に涙いました。平家繁栄の昔がしきりに思い出され、まこと人の世は夢まぼろしにございます」

おお、内乱の世に生まれ、生きてきた法然上人の上に、この日にいたるまで覆いかぶさり、求め続けてきたものは、生死無残の人の世と、この人の世の救済ではなかったか。

基親のことは聞いた法然上人は、閉じていた臉を開くと言った。

「阿弥陀の御誓いがある。生死無慚の人の世にも希望がある」静かな、しかし力強い声であった。

「われらはこの人の世に希望のあることを伝えねばならぬ」

立ち上がり、そして庵室の障子を開けて外を眺める法然上人を、基親は座したまま振り返った。

その基親に上人は言った。

「来て見られよ」

基親が立ち上がり、信空も上人の側に立つ

た。

春の月明かりに照らされ、夜の闇の中に京の町が眠っていた。

「苦しみと悩みに沈んでいるこの町に、われらは弥陀の誓いを伝えねばならぬ。希望の灯を灯さねばならぬ」

「……」

微かな夜風が三人の頬をなでていった。

この、生き地獄の苦患のなかに置かれている人々、生き地獄の苦患のなかに置かれている町。

法然上人がいうように、彼らに、この町に、今、京の町を眼下にしている三人は一切衆生救済の弥陀の救いを告げ知らせなければならなかった。

それぞれが心に深い傷を負いながら、今、三人は、存在の深みから湧き出る不思議な感動に襲われていた。

基親と信空の目から涙が静かにこぼれ落ちていった。

(第五章 おわり)

歳時記

年末になると「年用意」などといって、正月に用いる品の買出しやら、「松迎え」、「餅つき」といった行事に忙しくなります。

「餅つき」はともかく、「松迎え」とは、まず聞きなれない言葉でしょうね。十二月十三日の事始の日。正月の門松に使う松を山へ採りに行くことをいうのです。意味としては山から年神をお迎えすること。

戸の鈴もよく鳴るやうに年用意 中田みづほ
田仕舞の地蔵に供華や年用意 角川源義

よい風情ですね。新年への思いが伝わってきます。現代は少子高齢化社会とか騒いでいますが、昔から俳句のほうでは予測されていたもののように、

とことはの二人暮しの年用意 松本たかし

病僧やかさりこそりと年用意

川端茅舎

なんだか、侘しい哀しい句もたくさんあります。「大掃除」、「煤払」なども年用意の一種。何も年の暮れの忙しいときにわざわざやらないで、普段からやっておけばいいと思うのですが、清新な気持ちで新年を迎えたいという気持のあらわれでしょう。

江戸時代には十二月十三日が城内の煤払の日でありました。前述の松迎えと同じ日。一般庶民もやがてこの日に行うようになったようです。

命綱つけ大寺の煤払

阿部昭子

仏の手握りて煤を払ひけり

木内彰志

ダイナミックなお寺の煤払い。仕掛けは大胆。手つきは慎重に繊細に。やがて最後には

おしまひにおのれの煤を払ひけり 小張昭一



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●銀杏

〔特選〕
銀杏を埋火に焼き回復期

中島富士子

銀杏は「いちよう」とも「ぎんなん」とも読むので紛らわしいが、これは後者のほうである。病後の手を火鉢にかざしていると見たい。その火を少し弱くして銀杏を焼いている。体はもうだいぶんしつかりしてきた。

〔佳作〕松葉銀杏作りて夜の厨かな

金谷 友江

銀杏を踏んでみんなが鼻になる

小野由布子

銀杏散る蹲踞の水掬う手に

井村 善也

●月

〔特選〕
片減りの下駄を鳴らして月の人

金子ミサ子

片減りを目で見るには、月明といえども分りにくからう。だからその音で感じているのか。その人を知っていると見てもよいし、

〔特選〕

秋遍路徒の老女に杖長し

谷 しげ子

●自由題

〔佳作〕

あるいは自分が月の人になるという発想も面白いだろう。それらは読者に任されている。

上山加寿子

満月や吊り橋の影谷底に

浜口 佳春

伊勢海老の馳走賜り月を待つ

吉崎美和子

遍路は春の季語に入っているが、日和の続く秋にも札所巡りは盛んである。いま年老いた女人がとぼと次の札所を目指す。少し背が曲がっていて、杖が長く見える。「老女に」の「に」が効いている。

〔佳作〕

せせらぎの一筋光る花野かな

河合富美枝

停船の灯の赤々と野分を去る

石原 新

ふくらんで枝垂るる萩や猫ひそむ

増田 信子

読者の声

誌上句会〈編集部選〉

■銀杏

銀杏散る山また山の日溜りに
人待ちの車にぼとり銀杏の実
大銀杏こぼるるままの実を拾う
信号の黄のあと先に銀杏散る

河合富美枝
石原 新
井村善也
池田伊吹

■月

明日旅に発つ子と仰ぐ上り月
言霊の法話に涙す月の夜
オカリナの遠音に酔ひし月の客
片減りの下駄を鳴らして月の人

中島富士子
金谷友江
河合富美枝
金子ミサ子

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇〇八年十二月二十日
発表・『浄土』二〇〇九年二月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

兼題
蜜柑
毛布
自由題

■自由題

分校にけふ満月の来てござる
曲り家の月に濡れをる等かな
昼の月古書それぞれの積まれかた
埃から出て月光の絵本かな
着信の音そここに無月かな
ひと雨のありしか駅の月明り
肩馬の父子の影や月まろし

仁科祐輔
遠田曉美
新藤三枝子
三崎紀彦
結城澄彦
種田美津子
増田信子

美しき人の葡萄を摘めるなり
コスモスのこの路地が好き抜けてゆく
沙汰もなき友の身の上秋の風
頬杖の外は黄落三の丸
骨董の中の眼鏡や秋の雨
社殿へと朝露の女子弓道部
茜雲残して沈む蟬の声
伊勢平野花野分けたる鉄路延ぶ
流れ来る木の葉の色や涙は秋
水の面を紅葉に染めて古寺の池

金谷友江
中島富士子
金子ミサ子
石島佐和子
玉本正治
千葉 碧
斉藤幸雄
村上青女
佐藤ゆう
西井 正

さっちゃんね

56 かい目

かまちょよろう



冬ざれや山の寺には人もなし

岱潤

今年のカレンダーもいよいよ最後の一枚になってしまった。そしてこの日本も一〇〇年に一度の経済危機と首相が言うように、世界的恐慌に入ってしまった。投資家にとっては笑顔が消えた秋になった。

そんな折にまたも震撼させる話しが飛び込んできた。自衛隊航空幕僚長の論文だ。要約すれば「日本が侵略したなどというのは正に濡れ衣で、一九二八年の張作霖列車爆破事件も、一九三七年の盧溝橋事件も、真珠湾攻撃の決行もすべてコミンテルン（共産主義政党的国際組織）

のスパイ活動によるもの、我が国は日中戦争に引きずり込まれた被害者」としている。そして、十一月十一日の参議院外交防衛委員会で参考人招致に立ち、「私の書いたものは少しも間違っていない、日本を良い国だと言ったらやめさせられ、私が言えば千人の自衛官は動く」と豪語し、記者には「村山談話（政府見解）は言論弾圧の道具」と言い放った。

こんな人物が制服組のトップにいたのかと思つたら、恐ろしくなってきた。「悪いのは全て共産主義者、南京虐殺も作り話で、日本は悪いことなど何もしていない」。こんな相手の立場に立つて事実認識出来ない幼稚な論文を臆面もなく

出せる人物、彼こそが人権を考えられない差別者である。部落解放運動の父の言葉「戦争は最大の人権侵害である」を今一度かみしめたい。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十四巻十二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十年十一月二十日

発行 平成二十年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷端彦(佐賀・本應寺)
糸原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村康貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
鮎 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkann-jodo.info>

譬ひ如に大だい海かい例えば大海の如し
無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

海は、人に活力と万象の支えを教えてくれる。

人間は小さな存在。宗教は人間に命の輝きを補給してくれます。

人間が宗教を求めるのは、二つの理由からです。一つは人間の弱さの故に――自立できない、能力がない、左右されやすい、生老病死の不安。惨めな自己を捨て強さを求めて宗教に向かいます。

もう一つは、自己喪失に繋がる運命の絆を感じ

たとき――流動的社会、管理社会、核家族、危機的環境。仕切られた社会・環境を抜け出し、温かさを求めて宗教に向かいます。

宗教は「海」です。海が全ての命の源のように、宗教は弱い人間を支え強くし、心を温めてくれる世界です。

悲しき時は、海を見よ。

法然上人鑽仰会の

本

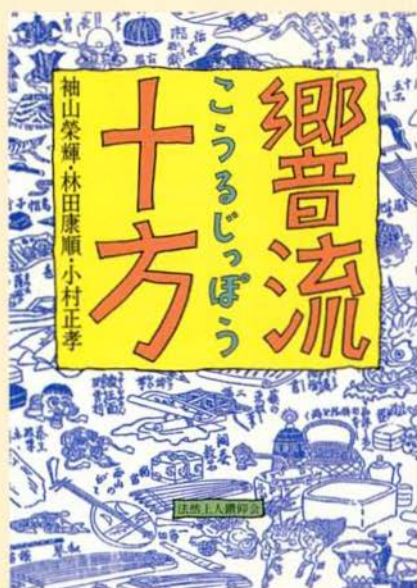
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット) 800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より